

安全における科学的事実と価値観

科学は、よく、価値フリー、すなわち、価値から独立している、または独立すべきだと言われる。客観性を重んじ、主観性を排除することが強調される。安全に関してはどうか。そもそも安全とは何か、何のための安全かを考えれば、価値から離れることはもちろん出来ない。しかし、どのような構造や仕組みで安全が確保され、どの程度の危険性（リスク）があるか等については、客観的に、合理的に、普遍的に、すなわち科学的に取り組むことが可能である。事実、技術者、事業者、規制側等は、科学的な安全の実現を目指して懸命に努力をしている。しかし、例えばある製品やプラントが安全であるという主張は、決して絶対安全を主張している訳ではないことは、最早、常識である。必ず、いわゆる残留リスクなるものが存在する。従って、安全であるというためには、どこまでリスクを低減したら安全と言えるか、という面では、価値観や主観性を排除することはできない。それでも、安全には、残されたリスクがどのようなものであるか、すなわち危害が起こる確率と共に、最悪の場合の危害がどのようなことになるか等の科学的事実を明示しつつ、お互いに許容可能性を探るという面からは、客観性を重視する姿勢が貫かれている。この点からは、当然、規制当局等が安全基準を策定する場合には、その科学的根拠や科学的事実を明示し、公開しておくことが必須である。

一方、消費者や一般大衆は、安心を求めているように思える。安心は主観的なものであり、判断する主体の価値観に依存する。安全を安心に繋げるためには、安全を実現している組織や人間を「信頼」することを通してしか得られそうもない。安全が実現されている構造やプロセスの透明性、情報の公開、安全の決定への市民の主体的な参加、リスクコミュニケーション等も信頼の醸成が重要な働きをする。安全と安心とをいかにつなぐかは、未解決のこれからの研究課題である。

安全と安心とは異なり、両者は明確に分けるべきである。すなわち、安全は、科学的探究を目指しているが、安心には価値観が関与している。科学（安全）と価値観（安心）は分けて考えるべきである。特にリスクの高い影響の大きなシステムに関しては、安心を得られない場合には、いくら科学的に安全であっても、売らない、買わない、作らないという判断はあり得る。ただし、我々民衆も、冷静にリスクを判断する科学リテラシーや安全文化を身につける必要がある。それが正しく怖がるための基本である。

監事 向殿 政男